

令和 5 年 度
宮崎国際大学 教育学部
一般推薦 I 期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題

次の文章は、細胞生物学者で歌人でもある ^{ながたかずひろ}永田和宏さんが、親が子どもと会話（対話）をする場合、どのようなことに心がけるべきかについて述べたものです。永田さんの意見を要約するとともに、それを踏まえた上で、あなたが先生になったとき、教育の場における子どもたちとの会話（対話）は、どうあるべきだと考えるか、600字以内で述べなさい。

親が子に対するとき、子どもが何か言うと、すぐさまそれを否定ないしは無視してしまう親は結構いるものだ。「そんな愚にもつかない空想みたいなことを考えてないで、早く勉強しなさい」なんて、思い当たる親も少なからずいるだろう。

そんな反応が、子どもの可能性を無為に摘み取ってしまっていることに、ほとんどが気づいていない。親として、子どもの言うことの是非を判断して、正しい方向性を示しているつもりの親が断然多いが、適切な判断と、子どもが自分の才能あるいは可能性に目を開かれることの重要性を較べてみれば、どちらが子どもの将来にとって大切であるかは、あらためて言うまでもあるまい。

子どもが思い切ったアイデアや思いつきを口にして、親がそれに否定的に反応する場合、多くはそれが無理だと判断することからくるのだろう。やってもきっと失敗する、挫折も味わうかもしれないし、第一、そんなばかばかしいことに費やすのは時間の無駄であると判断する。

しかし、子どもや若者には失敗経験こそが必要なのである。挫折も経験したほうがいい。なによりまずいのは、まだやりもしないで、それが無駄と言われてやる気をなくしてしまうことである。実行しないであきらめるよりは、実行して失敗を経験するほうが、はるかに有意義な時間となるはずである。

実際に実行するまで行かなくとも、子どもが考えたことを思考実験として推し進めるように誘導することも大切であろう。ある思いつきを話したら、「それで、次はどうするの？」と話を次に進める。一つの思いつきから、次のアイデア、手順、経路などなど、さまざまの可能性について、彼自身が考えを進められるように背中をおしてやるだけで、自らものを考えられるという自信を持つことができるものであり、さらにそれが例えば親に褒められたりすることで得る自信こそが、成功体験と同じような効果を持つはずなのである。

親はおだて上手であることが、必須であると思っている。日常のちょっとしたおだてが積み重なることによって、子どもの可能性の開き方は大きく影響を受けるはずである。

意見を言わずに、じっと相手の言葉に耳を傾ける。すぐに何か言ってしまうといたくなるものだが、それを辛抱して聞き続け、相談する相手の一歩上からものを言おうとしないこと、これはしかし、思っている以上に難しいことではある。

難しいことではあるが、まず、相手の言葉に寄り添いながら、海拔ゼロメートルの位置か

ら、可能性の最大値を考えてみることに、そんな自らの思考傾向の意識化こそ、若い世代の可能性をいっばいにまで延ばせる、あるいは開かせる契機があると言ってもいいだろう。

(永田和宏『知の体力』による・一部省略がある)

令和 5 年 度
宮崎国際大学 教育学部
一般推薦Ⅱ期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題

次の文章は、工学博士で「失敗学」の提唱者でもある畑村洋太郎さんが、子どもが失敗をすること、子どもに失敗をさせることの教育的な意義について述べたものです。畑村さんの意見を要約するとともに、それに対するあなたの考えを、自分自身の体験も交えて600字以内で述べなさい。

私が子どもだった時代、竹や木で細工した玩具を作るため、ナイフは必需品でした。ほとんどの子どもたちが、ナイフを上手に使っていました。ところが、いつの間にか「ナイフを使って、指など切って怪我したらたいへんだから」と、だんだんナイフを使った授業は減っていき、現在は家でも学校でも、子どもたちがナイフを使う機会がほとんどなくなってしまいました。

結果、子どもたちがナイフで手を切る事故もなくなり、一見、安全な生活が保証されたようにみえます。

しかし、裏を返せば、今の子どもたちには「ナイフで手を切るという小さな失敗を経験する機会」がなくなってしまったのです。そして、ナイフで手を切ったことのない子どもは、その痛みも、傷が後からどうなるかも知らないで、実際にナイフがどれほど危険なものなのか、知らないまま成長してしまいます。すると、いざナイフを使わなければならなくなったとき、ちゃんと使いこなせないばかりか、失敗して大きな怪我を負うことになるかもしれません。ナイフで切った痛みを知らないことで、他人をナイフで切ったり刺したりしたときの痛みも想像できなければ、痛みを知っている人よりは、安易にナイフを他人に向けることにもつながりかねません。

つまり、子どもの頃にナイフに触れる機会を失ったことで、後に大きな失敗を起こす可能性が高まるのです。

小さな失敗が起こるリスクを徹底的に排除し続けることは、将来に起こりうる大きな失敗の可能性を高めてしまうことになるのです。

現在主流となっている「これは成功、それは失敗」「こっちはオーケー、あっちはダメ」という〇×式の教育方法では、表面的な知識しか学ばません。そこに欠落している「真の理解」がないままだと、決して応用力を身につけることはできません。「ムダ」を省いた合理的な教育や勉強法は、効率的な学習を実現しやすいですが、それはあくまでも暗記を中心とした表面的知識の蓄積であって、体験的知識に基づいた「自分で考える力」の養成には役立たないのです。そのような現代の教育方法の弱点についても、きちんと考えなければなりません。

あえて必要と思われる失敗を体験させることで、子どもたちは自分自身でその失敗から体験的知識を学び、判断力や応用力を獲得するのです。

そう考えると、やはり実感を伴った体験学習が重要になります。失敗を恐れない気持ちを育み、失敗体験を積極的に活用する教育が今こそ必要なのです。

(畑村洋太郎『やらかした時にどうするか』による)